



Title	大阪市立中央公会堂の建築様式と意匠について
Author(s)	山形, 政昭
Citation	デザイン理論. 2003, 42, p. 116-117
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53125
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪市立中央公会堂の建築様式と意匠について

山形政昭／大阪芸術大学

大正2年に着工、大正7年に竣工開館した大阪市立中央公会堂は、近代大阪の様々な歴史の舞台として、水都大阪の象徴的な建築として夙に知られてきたものである。その保存を求める声に応じて、大阪による保存活用計画が昭和60年代より進められ、修理再生工事が平成11年春に着工、平成14年秋に完成している。

その建設事業は、明治44年に岩本栄之助の寄付を受けた大阪市が設置した財団法人公会堂建設事務所により実施され、明治45年の指名競技設計により選出された岡田信一郎の作案を得て具体的に着手されている。岡田による原案の特色は、平面計画の骨子、外観正面の大アーチ、4本のジャイアント・オーダーによるバロック的華やかさをもつ古典様式として、公会堂建築に実現されているが、着工に向けての実設計で公会堂建設事務所による修正がなされている。それは、建築規模など計画内容における修正、建築様式意匠に関わる修正、そして装飾や仕上材の変更に及ぶものであり、竣工時の記録では設計監督者として辰野金吾、片岡安の名が記されたように、実質的には辰野片岡建築事務所の作品としての内容をもつものである。

○建築様式について

様式について竣工時の建築記録には「復興式中の準バラディヤン式」とある。所謂ネオ・ルネサンス式と考えてよい。

公会堂の意匠はこのネオ・ルネサンス式として概ね読み解かれるものである。しかし当初の岡田案ではその枠組みを越える表現が所々

に見られるものだった。

たとえば、正面中央部に立つコンポジット式の柱頭をもつ4本のジャイアント・オーダー、階段室の外壁面に付与された長大な窓とその上部に置かれた円窓、そのシャフトの頂部には華麗な小ドームが冠され、その上には彫像や頂部飾りが置かれるなど、総体には意匠は多彩で劇的構成を特色とするバロック的な表現が導入されたものであった。

そうした岡田の原案を「意匠がゴツイ、枯れていない、若い、」と評した辰野は、自負を持っていた辰野式の構成へと修正を加えている。例えば窓上部のペディメントを付したアーキトレーブや、付柱に付された楕形飾りなどの古典的オーナメントを平面的幾何図形化したセセッション式意匠へと転換させたことである。この表現は辰野のパートナーであった片岡安の得意としたもので、コンペにおける片岡案のデザインとの関連に興味深いものがある。

○室内意匠について

内部意匠は外観に準じてネオ・ルネサンス式が基調であるがその幅は広い。各室ごとに種々の柱頭飾りを備えた列柱、付柱、腰壁パネル、扉建具回りの意匠などあるが、音響と材料の関係で最も工夫された部分として天井回りの意匠装飾のことが指摘されている。そして3階諸室に配されたステンド・グラス、種々の灯具や家具調度も特色あるものが多い。特別室、大集会室のカーテン、飾幕にはヴィクトリアン・ゴシックの趣が、また小集会室のインテリアにはエドワーディアン・スタイ

ルと指摘されているところもある。セセッション式意匠さらにモダンな構成と見られるものに、吹き抜けあるいはエレベーター・シャフトを挟む階段の配置やロート・アイアンの手摺子、大集会室2階席前面壁の装飾、そして地階食堂の室内意匠などがある。そうした洋風の幅広いデザインに加えて、注目すべき和風意匠がある。大集会室では折り上げ天井の扱い、プロセニウム・アーチを飾る舞楽面の石膏像装飾があり、大食堂側壁の四隅には方位を示す十二支の動物を図案化した透かし彫り装飾グリルなどが目につく。そして著名なものに貴賓室（特別室）に描かれた松岡壽画伯の天井画と壁画がある。また松岡壽の原画に基づく商神「メルキュール」と科学と平和を象徴する「ミネルバ」の神像が正面大アーチの屋上に置かれていた。貴賓室では壁面装飾の刺繍、ヴォールト天井を受ける梁中間帯に描かれた文様装飾などにも和風あるいは東洋風意匠が用いられている。また、それら工芸的装飾に対して、当時の工業製品である種々の仕上材も導入されている。たとえば、地階床、大集会室床の広い部位に用いられたアスファルト敷き床、1階階段ホール床に用いられた施釉セメントタイルなど、この建築の特色としてみるべきものと思われる。

○辰野式建築として

公会堂の建築は、いわれるように「辰野式」外観構成を示すものであり、早くに重要文化財指定を受けている旧日銀京都支店（明治39年）、旧日本生命九州支店（明治42年）、それに東京駅（大正3年）からつづく流れがここに認められる。またここでは大正期の辰野片岡建築事務所による旧二十三銀行（大分、大正2年）、等で用いられた円窓に着目したい。1階壁面上部に並ぶもの、あるいは階段の納まる塔の壁面を彩るもので、意匠に強いアク

セントを与えているものである。この円窓が大阪市中央公会堂においては、東正面の大アーチを挟む塔屋の特徴的意匠となり、また1階のコーナー壁面に並ぶ大型矩形窓と融合したユニークな外観モチーフとなっていることに気付く。そして窓に関して、公会堂は、鉄骨造を主体的に導入することにより、煉瓦壁面の拘束度を減じたことで、大型スティールサッシュ窓を各所に広く配ることができたのである。それによって得られた内外観の明朗性と、大集会室に見る大空間の雄大さを有するものとなった。

以上、公会堂の建築について、当初の建築案から竣工に至る建築計画と意匠について述べてきた。明治44年に設計競技要項が決められてより竣工まで、8年を要して建てられたこの建築は、大作で知られる東京駅と並んで、煉瓦を主体とする我国近代建築の到達点を示すものであった。また建築意匠の上では、岡田信一郎の原案を得てネオ・ルネサンス様式を基調としつつ、部分的にセセッション式意匠を用いるに加え、さらに和風意匠をも導入した、辰野式建築の展開を示すもので、当時我国における古典様式を基とする代表的建築の一つに位置づけられるものなのである。